

卒業証書授与式

3月18日(月)、海峰小学校で卒業式が行われました。西校長先生から卒業生7名に卒業証書が渡されました。校長先生の式辞、教育委員会告辞、来賓の祝辞、児童のお別れの言葉等がありました。門送りでは、万歳三唱が行われ、卒業生は元気に巣立っていきました。



卒園を祝う集い

3月25日(月)、阿尾保育園で「卒園を祝う集い」が行われました。卒園児11名は、清水園長先生から卒園証書をもらいました。卒園児たちは、保育園でがんばったことや小学校でがんばりたいことなどを元気に発表していました。



能登半島地震での神社の被災状況2 (森寺・指崎・北八代)



森寺の神社(愛宕神社)
・鳥居の笠木、貫等が破損
がんばろう森寺!



指崎の神社(天満宮)
・灯笼の宝珠が落下
がんばろう指崎!



北八代の神社(箭代神社)
・灯笼の笠、火袋等が破損
がんばろう北八代!

*公民館主事の独り言

※「五濁の時代に」 木村宣彰著 北日本新聞社新書 参照

プラトンの『プロタゴラス』のなかで「プロメテウス神話」に次のような内容がある。

神々があらゆる動物を創造し、自然の能力を賦与した。ある種には速さを、ある種には強さを、また、弱いものには子孫を残すために多産をというように、それぞれに「自然の本性」を配分した。それによって動物が等しく生き続けられるようになった。

ところが、最後に人間の番になったとき、すでに諸々の能力を使い果たして人間に与えるものは何も残っていなかった。そこでプロメテウスは人類を滅亡から防ぐため、神のものであった火と技術の知識を人間に与えた。「火」と「技術知」とを賦与された人間は、闇や獣から身を守ることができ、やがて都市国家を形成した。しかし、叡智を与えられなかった人間は、「火」と「技術知」のためにかえって災厄を招き、人間社会は荒廃していった。

人間以外の他の動物は自然界において自分の行動する範囲はこれくらい、自分が食べるものはこれくらいと、自然において棲み分けている。それぞれが節制しているようにも見える。ただ人間だけは果てしない欲望をもち、自己中心的に生活の便利・効率・快適を限りなく追求し、自然が持つ持続可能性までも疎外している。人間は自然の一部でありながら自然を手段として自由に管理できるものと勘違いしている。人間に叡智が与えられておれば、世界各地で起きている紛争や地球規模で起きている異常気象による自然災害等起きないのではないだろうか。



○4月の講座案内

| 講座名 | 曜日 | 開設日 | 講師・責任者 | 時間 | 部屋 |
|---------------|---------|-------------------------------------|--------|-----------------|----|
| 生け花 (池坊) | 第1・3水曜日 | 3日 17日 | 西山栄津子 | 10:00～ 14:00 | 洋室 |
| かな書道 | 第1・3月曜日 | 1日 15日 | 猶明 光華 | 13:00～ | 洋室 |
| 学童茶道& 百人一首 | 原則毎週木曜日 | 4日 11日 18日 25日 | 栗山 静子 | 15:00～ | 和室 |
| 手 芸 | 第3火曜日 | 16日 | 伏木あい子 | 13:30～ | 和室 |
| 潮華会(新舞踊) | 毎週土曜日 | 6日 13日 20日 27日 | 大野 朝子 | 19:00～ | 和室 |
| 潮月会(新舞踊) | 毎週金曜日 | 5日 12日 19日 26日 | 大野 朝子 | 13:00～ | 和室 |
| 囲碁サロン | 毎週月・水曜日 | 1日 3日 8日 10日 15日 17日 22日 24日 29日 | | 13:30～ | 和室 |
| フラダンス | 第1・3月曜日 | 1日 15日 | 東軒みさ子 | 19:00～ | 和室 |
| 常磐会書道教室 | 第2・4土曜日 | 13日 27日 | 名苗くみ子 | 10:00～ | 洋室 |

○阿尾公民館からのお知らせ

ふれあいランチ…指崎4/19(金)・阿尾なし

○おらっちゃん風土記 (定置網編)

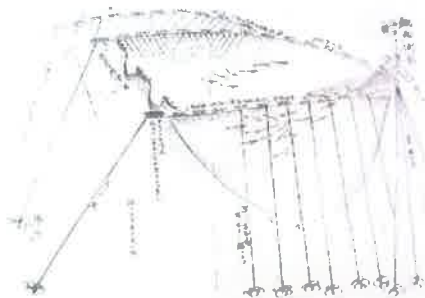
※「台網から大敷網へ」 小境卓治著 日本海学研究叢書 参照

令和3年2月、氷見の定置網漁業が富山県内では初めて日本農業遺産に認定されました。日本農業遺産とは、将来にわたり受け継がれるべき、伝統的な農林水産業が営まれている地域を農林水産大臣が認定するものです。さらに、氷見市では世界農業遺産を目指しています。

資源や環境にやさしい氷見の定置網漁業は、400年以上前から農林業や文化、信仰などと深く関わりながら、全国の定置網漁業のモデルである「越中式罾落とし網」に発展し、今でも地域を支えています。

そこで、阿尾地区とも関わりの深い定置網について調べることにしました。古いものからあたらしいものへ「わら台網→麻ちよう台網→大敷網→越中式ブリ落とし網」の順に紹介します。

わら台網



今から約400年前、宇波沖に夏網と秋網が敷設されていました。江戸時代の中頃になるとブリを獲る秋網とマグロを獲る夏網、イワシを獲る春網の三季の網が操業されていました。当時の網は、「わら台網」と呼ばれ、身網、垣網ともわら縄製で網の規模も小さいため各通統(一連の網)とも岸から沖へ一番、二番、三番と連続して張り出されていました。

この網は、口があいていて魚が入りやすいが、同時に逃げやすい欠点があります。そこで見張りの船が網口近くにとどまり、むしろで囲んだ「のま」の中で、冬などは抱え火鉢「つづはん」を抱きながら魚が網に入るのを見張りました。魚が入ると合図して仲間の船を呼び寄せ、網口に並び、網を手操って台の所でタモですくいあげました。

わらは身近にある豊富な材料である。特に穂の下のミゴの部分は強力でかなり細めのものができました。これは、明治の末まで続いていました。垣網にいたっては、昭和30年代まで使うところがありました。

1回の網起こしで300～500匹魚がとれた。資金は、当時のお金で500～600円かかりました。